目次

第1章 はじめに

第2章 従来のロビンズ像とその問題点
  §1 方法論と Political Economy
  §2 従来のロビンズ解釈

第3章 ロビンズにおける Economics
  §1 ロビンズ方法論の独自性
  §2 『本質と意義』におけるロビンズの経済学
  §3 価値判断と「合理性仮定」

第4章 ロビンズにおける Political Economy
  §1 LSE 以前のロビンズ
  §2 ロビンズと政策
  §3 経済政策と価値判断

第5章 ロビンズの経済学体系
  §1 Economics と Political Economy の関係
  §2 結論
第1章 はじめに

ライオネル・ロビンズは現代経済学に方法論的基礎を与えた経済学者と言われている。彼は希少性定義によって、経済学の対象の範囲を、人間の物質的な生活から、目的－手段の関係を持った行為が一般にまで広げ、現代の経済学に新しい方向性を示した。通常論される彼の貢献とは、このような新しい形で経済学を定義したことと思われている。しかしM.ブローグなどの学史的研究によれば、ロビンズは先行する研究を継承したに過ぎず、彼の経済学方法論には内容的な独創性は無いとされていた。

だがロビンズの方法論は他にはない特徴を持っている。ロビンズの経済学体系の基礎概念である、「方法論的個人主義」、「合理性仮定」、価値判断には、彼特有の厳密さによる独自の定義が与えられており、更に、彼の経済学体系である経済科学Economicsと経済政策Political Economyの関係は、「合理性仮定」、価値判断、「方法論的個人主義」という独創的な考えが前提とされていることによって、方法論的な一貫性が存在している。またロビンズは、「合理性仮定」を自然科学と経済科学を区別する唯一の前提だと定義することによって、経済学を社会科学における厳密な科学としたのだった。

本稿は、このようにロビンズの方法論と経済学体系の構想に独創的な視点があったという立場に立って、ロビンズの方法論上の概念の厳密さを明らかにし、さらにそれをロビンズの理論体系と結びつける。更に本稿は、独自の方法論を基礎に、厳密な科学としての経済学と社会改革を目指す実践的な経済学を統合した、一貫した体系を構想した経済学者というロビンズ像を描き出すことを目的としている。

本稿の以降の構成は以下の通りである。2章においてはロビンズの研究史をまとめた上で、ロビンズ解釈の問題点を指摘する。3章ではEconomicsの考え方、とりわけ彼の著作『経済学の本質と意義』におけるEconomicsの考え方を示し、Economicsと「合理性仮定」の関係を明らかにする。4章では、『古典経済学の経済政策理論』に見られる、イギリス古典派経済学者を社会改革者と捉える点で彼の独自性を検討し、古典派経済学者とその他の改革者を区別するものがPolitical Economyであり、Political Economyについてもまた「合理性仮定」が存在することを論じる。5章では3章及び4章の内容を踏まえた上で、ロビンズの科学観を示すことでロビンズ方法論の意義を示す。またこれまでのロビンズ解釈と比較した上で、結論としてEconomicsやPolitical Economyと「合理性仮定」と価値判断がどのように関わっているかを整理し、ロビンズが独自の方法論によって社会科学
学と自然科学を区別している経済学者であることを述べる。

第2章 従来のロビンズ像とその問題点

ライオネル・ロビンズは彼の自伝 Autobiography of an economist において「私の理論に独自性はなく、ただ偉大な先行研究者たちの業績によるものである」4と記した。彼の学説が多くの先行する理論に依拠していることは、ロビンズの「経済学は諸目的と代替的用途を持つ希少な諸手段との関係としての人間行動を研究する学問である」という有名な希少性定義にも何える。ここで使われている希少性や人間行動と言った言葉、あるいは著書『経済学の本質と意義』6に使われる合理性や価値判断と言った言葉自体は、既にロビンズ以前の経済学方法論の文献で経済学と関連付けられ、使用されている。たとえば、古くは18世紀のコンディヤックから、希少性は財の効用と関係するものとして扱われており、リカードウは希少財を労働の投入によって生産量を増やせないとした財とした。またワルラスは希少性を表す rareté という言に限界効用という意味を与え、希少性的概念に基づいて経済学の体系を考えた7。このように、経済学の基礎概念を希少性に基づいて定式化するという点では、ロビンズは彼らに依拠していたと見ることができる。またロビンズは合理性や人間行動といった言葉に関しても、特にミーずス、ウィックスティードに負っていることが、『本質と意義』の第1版への序文における2人への謝辞8からも理解できる。

以上のように解釈する限り、ロビンズの独自性は、これらの要素を合成して経済学の定義を明文化したという点に尽きるであろう。確かにロビンズの希少性定義に使われる言葉を抜き出し、その言葉について先行研究を基に吟味する限りでは、彼独自の観点は見出せない。ロビンズによれば、この定義は「大多数の現代経済学者の共同財産である諸命題をできるだけ完結的に断句」10したに過ぎないものである。『本質と意義』での希少性定義にはメンガー、ミーずス、フェッター、ストリグルといった典拠が参照されていた11。これは希少性や人間行動といったロビンズの方法論上の重要な概念が、ロビンズ以前から議論されていることを示している。以上のように解釈する限り、ロビンズは単なる先行学説の総合を行っただけとなり、『本質と意義』で示された彼の経済学方法論に独自性は見えなくなってしまう。

ところが、ロビンズの論述を丹念に検討すると、彼が希少性などの言葉を、先行研究者らとは違う意味で使用していることが分かる。例えば、ロビンズは『本質と意義』の中で
希少という術語に、「需要に対して限界である」という定義を与えている。
これは単に、
減少に存在しないという意味ではない。ロビンズは具体例を示し、品質の良い卵と悪い卵
の量を比較した際、後者は前者に比べて存在量は少ないが、それは〈ロビンズの意味で〉
希少とは言えずむしろ余分である、と説明した。『本質と意義』で使われる希少性は、
上記のワルラスなどに見られる一般的な定義とは異なる、より限定された意味を持ってい
た。このように、ロビンズの言葉を彼の術語の使用法に忠実に解釈することによって、従
来とは異なるロビンズ像を描くことができる可能性がある。

§ 1 方法論と Political Economy

経済学史家によるロビンズ研究では、経済学の新しい方向を 1 冊の著書として方法論的
に明快に纏め上げたことを除き、ロビンズの独創性は否定されてきた。ロビンズについて
の学術的研究は、ロビンズが死去した 1984 年以降、特に 1988 年の D. P. オブライエンに
よる Lionel Robbins14の出版が大きな契機となっている。これはロビンズ自伝を基にした
唯一と言える研究書であり、その中でオブライエンは、ロビンズが受けた思想的影響につ
いて論じた上で「ロビンズは主に古い道具をそれ自体発展させのではなく、それを応用
して問題を解決することに関わっていた」15と述べている。このような、ロビンズがそれ
までの経済学を継承したとする見方は、主に M. ブローグによる認識である。ブローグは
『本質と意義』を「シノア、ミル、ケアンズの立場をジェヴォンス、ウィックスティー
ドやオーストリアンの言葉によって言い換えたもの」と述べている。海外のロビンズ研
究では、このようにロビンズと先行する経済学者との継承関係の検討が多く見られる。ま
た他にはオブライエンの “Robbins Lionel, and The Austrian Connection”17や R. スキ
デルスキーの “The Wartime Diaries of Robbins Lionel, and Meade James, 1943-45”18
が、ロビンズの理論面・政策面における影響を論じている。

国内でのロビンズの研究は、『本質と意義』の日本語訳が出版された 1957 年以降に始ま
る。『本質と意義』の日本語訳者である辻六兵衛の「経済科学の方法的基礎・ロビンズ
『Nature』に関する一つのコメント」19は、早期時期のロビンズ経済学に対する考察を行
っている。ここではロビンズの経済科学に関する考えを示した上で、可能であるならば
経済科学と形而上学的根拠の交流が望ましいと示唆されている。辻はロビンズの詳細な分
析とは言えないとも、著者自身の立場から経済学研究の 1 つのありべき道筋を提案した。

ロビンズの経済学観の検討としては、高橋正立『経済とは何か―マーシャル対ロビンズ』
が挙げられる。高橋は、マーシャルの経済の定義である、「個人的並びに社会的な行為のうち、福祉の物質的要件の獲得とその仕様にきわめて密接に関連している部分」とする物質主義的定義を、ロビンズの希少性定義と比較して検討した。この論文では、ロビンズの定義が形式的であり経済の適用範囲が広すぎるために、本来は経済と考えられない部分までその定義を適用する境界を広げてしまったこと、それ故に、ロビンズによる経済学の定義は現代経済においては非現実的なものに転化してしまった問題を指摘した。高橋の認識は常識的なロビンズ像を捉えていると言えるが、ブローグによれば、このような経済学の適用範囲に関する議論は、ロビンズ以前から存在していたのである。

以上のように、方法論者としてロビンズを捉える見方に対し、彼が Political Economy を強調したことを指摘する研究もある。早坂忠「近代経済学とライオネル・ロビンズ」では、ロビンズが「純粋科学と、社会的究極的目標に密接に依存したレヴェルを異なる問題とを区別する習慣を採用し、どちらにも同様の注意を注いだ」ことが明らかにされた。早坂は、ロビンズが Political Economy を常に念頭に置いた Economics を考えていることを示し、この点がロビンズ批判者達に認識されていないが故に、ロビンズへの誤解が生じていることを論じた。この論文は1971年当時の宇沢弘文のロビンズ批判に異論を唱える形でロビンズの経済学の捉え方が論じているが、特にロビンズにおける Economics と Political Economy の明確化を期待している点が重要であろう。

木村雄一「ライオネル・ロビンズと効用の個人間比較」では、早坂によって示された経済学と政治経済学の関係をさらに明確に論じた上で、「ミルがベンサムの功利主義を修正したように、ロビンズも ICU（効用の個人間比較）の科学的不可能性に訴えることで当時のイギリス経済学に修正を加え」と結論付けている。木村は、ロビンズの Political Economy は価値判断を含み、その点で伝統的イギリス経済学に連なる政治経済学であると論じ、経済政策 Political Economy が経済科学 Economics を包括する関係である、ロビンズ体系の「二重構造」の存在を明らかにした。しかし、木村は、この「二重構造」自体を、詳細には説明していない。

また早坂が指摘したロビンズへの誤解を同様に論じたものに、原信芳「ロビンズ経済学の断章」がある。原は『本質と意義』におけるロビンズの存在命題と当為命題の区別を述べた上で、この区別が、スミス、ケインズ、ピギーにも共通して存在する考え方であることを論じた。

根井雅弘「破れた夢―ライオネル・ロビンズの生涯(新・評伝シリーズ 4)」は、未
だ日本語訳が行われていないロビンズ自伝を紹介している。根井はロビンズの生い立ちから政策や教育に関わっていく生涯を簡潔に紹介しており、これまで『本質と意義』での希少性定義との関連ののみで語られてきたロビンズを、様々な分野に関わった多彩な人物として捉えるべきである、と主張する。根井は、ロビンズは「思考が flexible であった」28と述べており、単に『本質と意義』の著者として、あるいはオーストラリア学派の信奉者としてロビンズを把握することに異論を唱えている。

以上のように国内のロビンズ研究では、具体的内容は詳細に検討されていないが、ロビンズの経済理論に含まれる Economics と Political Economy の存在が重要であるということが主張されてきた。

§ 2 従来のロビンズ解釈

以上の専門研究から離れると、これまで一般的には、ロビンズは古典派の流れを汲むオーストリート学派に属し、反ケンブリッジの立場を取っており、LSE での社会主義から個人主義の流れの境界に位置する経済学者と見られてきた。実際『本質と意義』に関しては、ピゲー経済学を批判する意識があったと考えられる。これは従来支配的であった物質的厚生を主題とする経済学の反対として、希少性に基づく経済学を展開した点から理解できる29。ロビンズは、「物質主義的定義」は非物質的なサービスに関する分野を扱えないこと、孤立した個人の活動を考慮した際の労働時間と余暇の時間配分という経済的問題が定義の範囲外に置かれてしまうことを指摘した。そして、ロビンズは、物質主義的定義を用いず、希少性定義による方法論的個人主義を主張した。以上のような理解によれば、古典学派またはオーストリート学派の用語を用いてケンブリッジ学派へ対抗して方法論的個人主義へ至る、というロビンズ像を描くことになる。

これまでの学史的研究では、ロビンズは独自の仮説や経済理論を作り出したわけではないと言われてきた30。木村が述べたように、ロビンズは、効用の個人間比較の非科学性を用いて、当時のイギリス経済学に修正を加えたのであり、「若き日に大陸の経済学の影響を受けたとは言え、やはり最後までイギリスの土壤を離れなかった経済学者」31であった。また、オブラフレンによればロビンズは、シノピア、ミル、ケアンズからアプリオリズムを得て、ウィックスティードからは選択や最大化、機会費用による配分のアプローチ、一般均衡の枠組みを受け継ぎ、オーストラリア学派からは特にミシェスの著書 Money や Socialism における考えを継承した32。その上でロビンズは、イギリス古典派経済学を背
景に持っている。これらの意味ではロビンズが自らの功績を、過去の研究者の業績の積み重ねだと言うのは理解できる。

しかしロビンズの言葉を彼の使用法に忠実に解釈すると、先行学説を明快な著者にまとめて普及させた、たんなる一種の総合家であるにとどまらない、独創的な経済学者としてのロビンズ像を提起することが可能である。彼の「方法論的個人主義」は「目的に対し手段を用いる個人」と定義されている。この「方法論的個人主義」によって論じられる経済学は、必ずしもケインズに対抗しているとは捉えられない。

早坂が指摘したように、ロビンズの考える経済学Economicsは経済政策Political Economyのために研究される科学である。政策の合理的な選択という目標が達成されるためには、選択肢の意味内容を理解しなければならない。次章で論じるように、まさにそのためにロビンズは経済学に科学としての厳密さを与えようとして、「規範的価値判断」を排除したのである。ロビンズは経済理論の科学性を保証する目的で、純粋理論に方法論的個人主義を適用したに過ぎず、経済政策という実践の場においては、必ずしも方法論的個人主義を用いるわけではない。実証経済学が「規範的価値判断から自由な経済学」だと言ったとしても、それは実証経済学が「規範的価値判断」とは無関係な経済学だ、ということではないのである。また、政策提言は、後述する「規範的価値判断」を含むため、科学の範疇を超える問題になる。J. M.ケインズは「経済学は、自然科学ではなく、基本的に道徳科学なのである」と主張したが、ここでJ. M.ケインズの言う経済学は、ロビンズの経済学体系における経済政策を意味している。以上より、政策を目的とした経済学という観点では、ロビンズはJ. M.ケインズと同じ経済学観を持っていたと解釈できる。

ロビンズの経済学方法論にはロビンズ独自の定義による仮定があり、この仮定がロビンズの経済学体系の本質を構成している。『本質と意義』を参照している文献は多いが、全体的にロビンズの方法論の基本概念の詳細な分析が不十分である。それらはロビンズの術語を彼の定義に即して理解せずに、従来の意味内容で解釈しているために、ロビンズの方法論に含まれる厳密さが蔑ろにされてしまっているのである。

第3章 ロビンズにおけるEconomics

§1 ロビンズ方法論の独自性

ロビンズは「希少性」や「価値判断」を彼独自の仕方で定義し、それを『本質と意義』
にて論じられる「方法論的個人主義」の前提とした。特に価値判断について、ロビンズは「相対的価値判断」のみではなく、さらに根本に仮定される究極的な価値判断として、人間行動の「合理性仮定」を論じている。本章ではロビンズの経済学体系の基礎概念を確認し、それに基づいて、ロビンズにおける Economics とこれらの前提との関係を論ずる。

『本質と意義』では①「相対的価値判断」に加え、②「合理性仮定」、①と②を前提とした③「方法論的個人主義」に関して、ロビンズ独自の概念が定義されている。以下では①「相対的価値判断」、②「合理性仮定」、③「方法論的個人主義」を、ロビンズの用語法に基づいて説明する。

ロビンズは『本質と意義』の中で、価値判断に対して2つの意味を持たせている。第1は、科学の範囲では扱われないとされる、「～すべきである」という規範的な価値判断を指す。この意味での価値判断は、その非科学性によって経済学 Economics から排除される。本稿ではこの価値判断を、個人の主観を超え、社会の中で普遍的に妥当性があるとみなされる意味で、「規範的価値判断」と呼ぶ。第2は、ロビンズが独自に定義した「選択において順序付けが可能」であることのみを指す価値判断であり。①②の価値判断を①「相対的価値判断」と呼ぶ。選択者は個々の選択肢の絶対的な価値ではなく、他の選択肢と比較することによってのみ選択肢の優劣を判断することができる。したがって、これは個人の主観の中でのみ妥当性を持つ、「相対的」な価値判断である。この①「相対的価値判断」は、経済学においては「選択をする個人」を想定する上で欠かすことのできない仮定であり、経済学体系の前提条件として用いられるために、その内部で議論される必要がある。

経済分析における②「合理性仮定」は「目的のある行動を取ること」と定義される。仮に、行動に目的が存在しなければ、経済学の研究対象である手段と目的の関係が意味を持たなくなるため、「合理性仮定」は経済学の前提として用いられる。「合理性仮定」は、行動に矛盾がないことを意味するものではない。目的のある行動に矛盾が存在することは、自己の成しつづることの意味内容を知らない個人の行動では起こり得る。ロビンズ自身の例を挙げると、「消費者の需要を最も完全に充足することを同時に望むことはしばしば矛盾する」が、経済学にはこの結果生じる事態を説明する資格がないとは言えないのである。このようにたとえ目的に矛盾があるとしても、手段はその目的に関して稀少であるかもしれない。したがって、人間の行動が経済的側面を持つにあたり仮定される合理性は、「行動に
矛盾がない」という定義では正確に表せないために、「合理性仮定」は「目的のある行動を取ること」と定義される。

『本質と意義』で使われる、合理性という言葉は、ミーセスが「すべての行動は単に植物的な反作用と対立する程度に合理的なものと考えられねばならぬ」と述べる際とほぼ同じ意味である、とロビンズは指摘している99。この点でロビンズの合理性は、ミーセスに依拠していると見て差し支えない。またここでの合理性は一般的な意味で使われる「倫理的に妥当な行動」を意味しない。倫理的妥当性、つまり個人の価値判断が尊重すべきものかどうかという問題は経済分析の対象ではないからである。

以上の①「相対的価値判断」と②「合理性仮定」を前提として、ロビンズの③「方法論的個人主義」は「目的に対し手段を用いる個人」を想定する40。『本質と意義』では、希少性を考慮して手段を選択する個人を想定する「方法論的個人主義」が論じられているが、『本質と意義』の行動する個人とは、自己の効用を最大化するなどのいわゆる「極大化—極小化を行う経済人(ホモ・エコノミクス)」や、「利己的な決定を行う経済人」ではない。個人は自己のみでなく他者の利益を考慮するかもしれないが、ロビンズの言う個人が持つ①「相対的価値判断」という概念には、利己的・利他的のどちらの判断も含まれている。

目的に対する手段はその目的に沿ったものであること、その手段は個人の「相対的価値判断」を考慮したものであること、という条件が揃うことで初めてこの「目的—手段の関係」は経済学分析の対象となる。

このようにロビンズは多くの言葉に特殊な定義を与えている。それは明文化されており、意味の過不足がないという意味で厳密なものである。ロビンズの特殊な語法に基づくことで、ロビンズは独自の方法論を提起したと見ることができる。また、これらの言葉の定義を厳密に捉えることで、経済学の総体に対するロビンズの構想の独自性が浮かび上がり、また彼の特徴である科学としての厳密さを経済学に求める立場がより明確になる。次節以後ではこれらの論点を検討する。

§2 『本質と意義』におけるロビンズの経済学

本節では、ロビンズによる Economics と Political Economy の分類のうち前者を取り上げ、その特徴を述べた上で価値判断や「合理性仮定」との関係性を論じる。

ロビンズの経済理論で論じられる、Economics と Political Economy の2つは、ロビンズ経済学の体系を形成するもっとも重要なものである。Economics (Economic Science)は「規
範的価値判断」を含まない経済科学と定義され、対応する形としてPolitical Economy は「規範的価値判断」を含む経済政策であるとされている。この2つの考えが『本質と意義』のみではなくロビンズの著書全体を通して貫いて見られることは、すでに早坂が明らかに指摘している。また木村はEconomicsとPolitical Economyにそれぞれ大陸経済的側面と古典派経済的側面を見出していて、この2つの経済学の概念がさらに明確に示された。どちらもロビンズの経済学をEconomicsとPolitical Economyに分類しており、この点がロビンズの経済学体系の特徴であると理解できる。

J.N.ケインズは、ロビンズにおけるEconomicsとPolitical Economyと同じように、経済学を分類した。N. ケインズの分類では、(1)科学としての経済学と呼ばれる実証科学、(2)規範的・政策的科学、(3)目的達成のための術、の3つに分けられる41。(3)は経済学全体から区分されたものを示すため、ここでは排除するが、(1)はEconomics、(2)はPolitical Economyに対応すると考えられる。この分類は、ロビンズの分類と本質的に同じ考えであるが、ロビンズは「規範的価値判断」によって(1)と(2)を区別すると共に、(1)の根底には「選択において順序付けが可能」という独自の意味を持つ「相対的価値判断」の存在を仮定している。この定義の存在によって、N. ケインズにはない厳密さがロビンズの経済学の分類に加わった。

ロビンズによれば、経済学者の目的は政策決定である42。決定される政策は国民全体の利益を考慮しなければならず、したがって、その政策は合理的43でなければならない。そして「選択において合理的であるということは、まさしく、捨てられる代替物を完全に知っていて選択する」44ことによってのみ達成される。経済政策Political Economyは「規範的価値判断」を含む故に経済科学Economicsを超える問題を扱うが、その問題の意味内容を把握するために（つまり、選択において合理的であるために）Economicsが用いられる。

ロビンズによると、経済科学Economicsは本質的に自然科学ではない。次節で述べるように、Economicsは、その根底に「究極の価値判断」である「合理性仮定」を前提していることにより、社会科学に属する。ロビンズにおける「合理性仮定」は「目的のある行動を取ること」を意味する。つまり、経済学は「必要の範囲内において、調和的に達成されるような諸目的を選択することが望ましい、ということをまさに仮定するのである」45。この意味で「合理性仮定」は、経済学の定義よりも根底に位置する最初の仮定である。経済学はこの「究極的な価値判断」である「合理性仮定」（知識をもって選択し得ることが望ま
§3 値値判断と「合理性仮定」

Economicsの構築を目指して著られた『本質と意義』は、経済科学における値値判断の排除を主題としている。この場合の「値値判断」とは、EconomicsとPolitical Economyを区別する「〜すべき」という当為命題に関する判断のような、「規範的値値判断」を意味する。「〜である」という存在命題と、当為命題による経済学の区別はロビンズの行ったものであるが、Economicsの内には、ロビンズ独自の定義による「相対的値値判断」が存在する。

前述したように、「相対的値値判断」は「選択において順序付けが可能であるという意味を持つ。これはロビンズが述べた希少性定義の条件にも含まれる定義である。経済学で想定される個人は、客観的な値値の基準を持っていないために、自己の選好内容を客観的に測定することができない。個人はただ選好内容を自己の判断で順序付けることができるのみである。この意味で、この値値判断は相対的と言える。また絶対的測定基準を持たないため、個人は他人の値値を客観的に観察することも、同様にできない。更に、個人は自らの選好順序を判断することができるが、絶対的基準がないためにその順序を個人間で比較することは科学的に正当化されない。このような論理によって、ロビンズは効用の個人間比較を非科学的と論じ、経済学から排除した。したがって「規範的値値判断」は科学的範囲外に置かれた経済学で論じられる問題ではなくななるが、他方の「相対的値値判断」は経済学の定義の内に含まれるものである。

このようにロビンズは値値判断の非科学性を論じながらも、経済学の根底に存在する排除できない「究極の値値判断」である、人間行動の「合理性仮定」の存在を認めていた。

「合理性仮定」は経済学に必然的に含まれる仮定であり、純粋科学と社会科学を隔てる唯一の壁である。この意味で経済学にとっての「合理性仮定」は経済学を定義する上で、最初の前提条件である。

また、「合理性仮定」は経済学に「意義」を与えるものでもある。ロビンズは「経済学は、その存在のためにではなくて少なくともその意義のために、まさに究極的な値値判断—合理的なこと、および、知識をもって選択しうること、が望ましいという断言—に依存する」47と述べた。経済学は何らかの規範を与えるものではないが、その根底には「究極的な値値判断」がある。経済学は、個々の選択問題に対して、科学的な基準による決定を
下すものではないが、選択の意味内容を把握し、それらに価値付けを行い、最も望ましい選択を示唆できる点において、経済学は社会的意義を持つ。そしてそのためにこそ、経済学は「合理性仮定」に依存するのである。これが実際に何を意味するかは、次章で検討する。

第4章 ロビンズにおける Political Economy

§ 1 LSE 以前のロビンズ

本章では、Political Economy で合理性がどのように扱われているかを考える。経済学史の教科書で通常扱われるロビンズは、しば『本質と意義』の著者として理解され、経済学に新しい定義を与えた経済学者とされて来た。そのため政治経済学者としてのロビンズの主張はほとんど取り上げられなかった。ロビンズと経済問題との関わりのルーツ、或いは1930 年代以降に見られる彼の仕事を辿ると、抽象的な方法論者というロビンズ像とは対照的に、ロビンズが政策提言に対する強い意欲を持っていたことが分かる。彼の分類によるPolitical Economy にはそのような彼の政策への態度が反映されている。Political Economy と合理性の関係を知るためには、彼の経済政策に対する見方を示す必要がある。本章では、LSE 以前のロビンズと彼の政策の古典派的傾向の関係を分析し、彼の Political Economy においても価値判断が存在していることを論じる。

ロビンズの政策観には、第1 次世界大戦が大きく影響している。ロビンズは 1915 年からの 3 年間、親子の反対を押し切って軍隊に所属していた。ロビンズの父は、ロビンズが兵役に取られないうちに少しでも大学で勉強をさせようとした。1915 年に彼をロンドンのユニヴァーシティカレッジへ入学させた。ロビンズは大学で人文科学を専攻するが、彼は常に「戦争とそれに自分が参加していない事実」について考えていた。ロビンズはその点について多く記してはいないが、年内に大学を離れて入隊した事実が彼の考えの強さを表している。それは決して戦争自体ではなく、国家という共同体のために何かをしなければならないとの考えてのことだったのかもしれない。彼の家族は全員が、戦争は国際紛争を解決する手段として不適切であり、また国際関係の発展は戦争をより起こり難くするものと信じたが、リベラリズムに属していた。が、ロビンズはそれでも戦争に参加したのであり、この点から彼の国家や自由に関する考えの萌芽を見ることができる。

1918年に傷病兵としてイギリスへ送還された後、大学へ戻る意欲もなくしたロビンズにとって、戦時中のイギリスの首相アスピスの政策は我慢がなければならないものであった。続く
ロイド・ジョージの施政にも嫌悪感を催すようになり、彼には政策について信頼できるようなものがなくなっていた。共産主義にも『資本論』のマルクス主義にも興味を引かれることのなかったロビンズに、大きな印象を与えたのはギルド社会主義であり、彼はギルド社会主義に社会変革への期待を寄せた。

ギルド社会主義運動は若かった彼にとって未知の分野であり面白いいものだった。しかし時間が経過するに従い、期待されている社会改革が現実的に非常に遠いものであること、また社会主義運動者たちは経済問題に無理解であることにより、社会主義運動そのものに幻滅を感じるようになる。社会主義運動者たちの主張は、財産を国有化し、産業統制を労働組合に委ねることのみであり、これらの主張には経済学的な根拠が皆無であったため、ロビンズはこの運動に対して不満を持つようになった5②。資源は常に有限であり、人々の要求を満たすためには有限な資源をどのように配分するか、という問題が重要であること、ロビンズは気付いていたが、社会主義者たちはこの根本的考えが忘れられていた。このようにして社会主義運動に身を投じて1年後には、ロビンズはこのイデオロギー的基礎にも疑問を抱くようになった5③。

その後LSEへ入学しハロルド・ラスキとの対立を経て、ロビンズは以前の社会主義から解放される。その後、ロビンズは政策的立場を彼本来の考えである自由主義に置く。しかし、社会主義からは脱したが、社会改革の意思は彼の中に残っていた。それは後に古典派的な経済政策理論という形で表に現れる。

§2 ロビンズと政策

ロビンズの社会改革への意思と政策は、彼の経済学体系とどのように結びついているのだろうか。ロビンズの政策は古典派的であると言われている5④。それは1930年代以降にロビンズが提案した、一貫した自由主義的政策の主張からも理解できる。また『古典経済学の経済政策理論』を見ると、ロビンズ自身にもその自覚があるように考えられる。そこで、以下では『古典経済学の経済政策理論』5⑤に基づいて、ロビンズの政策に関する古典派的傾向をっていく。

ロビンズは『古典経済学の経済政策理論』の中で、自分はイギリス古典派の経済政策の記述と分析による説明をするのみである、と述べているが5⑥、実際にはその中で古典派の政策理論の概観を示した上で、独自の古典派経済学認識を示している。ロビンズはイギリス古典派経済学者が提唱した経済的自由の体制、国家の経済的機能に関する理論といった
考えについて検討した上で、イギリス古典派経済学者が改革者であったこと、また単なる
功利主義ではない、個人主義的ユーティリテリアンであったこと、経済的自由の体制が維
持される限りでは、彼らが観察主義の効用を認めていたことを論じた。

ロビンズによれば、古典派経済学者は「その時代と制度とその時代の習慣の若千に対し
て批判的であり、かつ改善するようになったところについては、はっきりとした提案をもっ
ていた」。この点から、ロビンズは、歴史的役割と心理学的態度において「古典派経済
学者が改革者であったことおよびイギリス古典経済学における社会政策理論は、経済改革
および社会改革の理論であったこと」を論じている。古典派経済学者は「一つの体系を
なしている科学的知識－政治経済学（Political Economy）という新興科学－もとづく」
という点で、その他の歴史上多くの改革運動・改革者と異なっている。彼の作る実際的
処方、政策は、経済諸関係の性質を考慮しており、それは実際の政策において結果を考慮
するということではなく、経済体制全体に対する総合的な分析に基づいているのである。
ロビンズは、『古典経済学の経済政策理論』において、古典派経済学者の分析方法の妥当性
を立証しようとしたのではなかった。彼は、経済学の源流にあるはずの科学的な部分が、
政策の考察にある種の権威を与えた、と論じたのである。

さらにロビンズは、古典派経済学者が個人主義的ユーティリテリアンであったと見てい
る。功利主義それ自体には個人主義的な規範を何ら含んではいないが、そこで求められ
る最大幸福とは個人の判断による幸福を意味しており、個人の効用は個人によってのみ正
しく評価されるため、この意味で古典派経済学者は目的に対して個人主義である。また古
典派経済学者にとって、「私有財産と市場をを主要基礎とする生産の組織は、消費と将来へ
の備えに関する選択自由の制度に対する不可欠の補完物であった」ことから、手段に向
いても個人主義である。ロビンズは政策における目的と手段の両面から、個人主義的ユー
ティリテリアンとして古典派を理解した。

このようなロビンズの古典派の見方は、ロビンズ自身の政策論と結びついていく。ロビ
ンズが無償化した社会主義者達には、経済学的知識が欠落していた。仮に社会主義者達が、
ロビンズが納得するような経済学的知識をもっていたとすれば、ロビンズは社会主義に幻
滅を感じることは無かったであろう。現状に対する社会改革の意思と経済学的知識を保持
した改革者とは、ロビンズの言葉では古典派経済学者を意味している。ロビンズが青年時
代より持ち続けていた社会改革への意思は、その後に自由主義を含む経済学と出会うこと
で、彼を、古典派経済政策の再認識へと導いたとしても不思議ではない。
§3 経済政策と価値判断

社会改革の意思を基に、ロビンズはイギリス古典派の経済政策を再評価し、また自らも古典派の政策に共感を持っている。しかしあなたの理論家としてのロビンズの特徴は、古典派的な政策を提唱する際にも、その根拠に価値判断が存在することを理論的に明確化している点にある。ロビンズは経済的自由の体制に対し，①消費者にとっての選択の自由と②生産者における自由という２重の根拠があり、それぞれに積極的・消極的理由があると述べている。①消費者における自由の積極的理由は、消費者は自分の利害に対する最良の判定者であることである。ロビンズはこの点についてベンサムの「あなたの利益になるのが何かを一番良く知っているのはあなた自身である」という言葉を引用している。また消極的観点にもベンサムの言葉を用い、自由に関する干渉が強制と苦痛を伴うこと、そのため行われる政府の選択が貧弱なものになりがちであることを主張する。②生産者の自由における積極的理由とは、利己心という普遍的な力による生産の機構を装備するのが望ましいこと、その利己心が利益に貢献することは競争によってより強められることであり、この２つを補強する形で、自由市場以外のあらゆる機構はこれより劣っている、という消極的な信頼がある。

この①，②の積極的理由は，3章で検討した方法論での「相対的価値判断」からの論理的に導くことができる。消費者及び生産者は自己の効用のみを相対的に判断することのみが可能であり、他人の効用については判断ができないという意味で、個人は「自分の利害に対する最良の判定者」だと言える。これらはそれ自体が経済的自由の体制の理由を意味するが，3章で述べたとおり、「相対的価値判断」が持つ「選択において順序付けが可能である」という条件が仮定されないことは、たとえ経済的自由の体制が確立されたとしても、合理的な選択を取るという最終目的を達成することができない。この意味で「相対的価値判断」は経済的自由の体制を論じる上で欠かすことのできない仮定であると共にある。その体制を含む古典派経済政策の根底に存在する仮定でもある。経済的自由の体制そのものは個人の選択を決定するものではなく、それは「相対的価値判断」を実践においてより円滑にするだけである。

また、経済政策Political Economyでは「規範的価値判断」が仮定されており，Economicsに「規範的価値判断」を加えたものと理解できる。Political Economyにとっての「規範的価値判断」の役割は，Economicsによって選択の意味内容を理解した上での実践であり，
そこには現状をより良くしたいという意思が働いている。ロビンズの政策理論ではその意思とは社会改革であり，Economics に実践的意思（社会改革）を加えたものが Political Economy を構成すると考えられる。こうして Economics は Political Economy の部分集合として存在しており，このことからも経済政策 Political Economy は，経済学 Economics と同じ根本的な仮定の上に立っていると考えることができると考えられる。

第 5 章 ロビンズの経済学体系

§1 Economics と Political Economy の関係

本章では 3，4 章を踏まえて Economics と Political Economy の論理的構造を明らかなにし，その上でロビンズの功績と言える点を述べて結論としたい。ロビンズの Economics と Political Economy が，後者が前者を包含する「二重構成」であることは木村が示した通りであるが，木村は「二重構成」自体の構造については詳しく述べていない。本節ではこの「二重構成」が，方法論的に一貫した考えに基づいて構想されていることを示す。

3 章で，Economics においては「合理性仮定」，「相対的価値判断」，「方法論的個人主義」に関してロビンズ独自の定義が与えられていることを述べた。まず「合理性仮定」は Economics が人間を扱う以上避けられない「究極の価値判断」であり，それは同時に自然科学と Economics の間に境界線を引くことになる。この意味で「合理性仮定」は Economics の根底に位置する条件を表している。またこの「合理性仮定」を前提とする Economics では，選択肢の意味内容を知るという「経済学の意義」は，「合理性仮定」に依存している。次に「相対的価値判断」は「選択において順序付けが可能」というだけの意味を持つが，この定義が経済学に含まれるならば，それは本質的に効用の個人間比較を否定していることになる。「相対的価値判断」の定義には他人の効用の測定を正当化する意味が一切含まれて居ないためである。

「合理性仮定」と「相対的価値判断」という 2 つの条件が揃うことで，初めて「方法論的個人主義」へ移ることができる。「目的に対し手段を用いる個人」という仮定条件が示されることにより，ロビンズの希少性定義は経済学の定義として機能する。この意味で「合理性仮定」，「相対的価値判断」は Economics の核とも言える要素である。

一方 4 章で検討した Political Economy は，大枠として「規範的価値判断」を前提に置いた Economics と考えられる。この「規範的価値判断」は政策を実行するための指針とな
るものである。それは科学では語られない、決定という「意思」であり、Economics をPolitical Economy へ変質させる。その実践的側面から、ロビンズにおける「規範的価値判断」は社会改革の意思と考えられる。また Political Economy はその内に Economics を含む性質上、「合理性仮定」を必然的に前提とする。そして Political Economy には経済的自由の体制を正当化する根拠として「相対的価値判断」も前提としている。

さらにロビンズの考える古典派経済学者が、個人主義的ユーティリテリアンであったことに注意したい。彼らの目標は個人的選択による幸福の追求であった。以上から、ロビンズにおける Economics と Political Economy は社会改革の意思という「規範的価値判断」によって区別されているが、その内には「合理性仮定」、「相対的価値判断」、「方法論的個人主義」という共通した要素を保持していることが言える。

以上に述べた Economics と Political Economy の関係において注目すべき点は、個人主義に関してである。経済科学という理論にも、また実践的政策にも個人主義が保持されているのは、ロビンズの特徴的なみである。ケインズが「ロビンズ教授は、ほとんどただ一人、整合的な思想体系を維持し続け、彼の実際的な勧告も彼の理論と同じ体系に属しているが、これが彼が異彩を放っている点である」と述べたとき、ケインズが意味したのはロビンズの個人主義に関してのことであろう。

§2 結論

本稿は、木村の言うロビンズ体系の「二重構造」という大枠に依拠した上で、経済学Economics にロビンズにとって社会改革の意思である「規範的価値判断」を加えたもののが経済政策 Political Economy であると位置づけた。そして Economics が Political Economy を目標にしていること、両者には「合理性仮定」、「相対的価値判断」、「方法論的個人主義」という共通した仮定が置かれていることを論じ、Political Economy の一部を集合として Economics という関係性に厳密な一貫性が存在することを示した。

このような Economics と Political Economy、「合理性仮定」、「相対的価値判断」、「方法論的個人主義」といった定義を定めたロビンズの構想から、ロビンズ独自の科学観が同える。ロビンズの定義では、経済学は「究極の価値判断」である人間行動の「合理性仮定」を前提とせざるを得ないため、経済科学はその性質上自然科学では無く、社会科学に属する。だが、ロビンズは、経済学が自然科学から遠く離れて研究されるべきだと述べてはいない。それは『本質と意義』において、経済法則を自然科学と対応させていることからも理
解できる。経済学を自然科学に匹敵する厳密な学問にしようとするロピューズの意図は、政策において親権主義の効用を認めながらもできる限りそこから離れようとしたように、経済政策の一部としながら、そこから離れて経済科学を厳密に定義した点に見られる。ロピューズは「規範的価値判断」によって経済科学と経済政策の区別を行ったが、同時に「合理性仮定」によって自然科学と経済科学の間に存在する（決して超えられない）ただ1つの前提を規定したのである。この意味でロピューズは、経済学をかつてないほど厳密かつ明確に定義した経済学者と言えるだろう。

本稿はロピューズの方法論の理論的内容が中心であったために、実際家としてのロピューズの研究での課題が多く残されている。特に Economics はロピューズが行った政策にどう使われていたのかという問題がある。Economics と Political Economy の両方に注意を払ってきたロピューズは、実際的役割を理論通りに進めることができたのだろうか。また LSE ウェップ夫妻の社会主義とロピューズの社会主義の差異についても論じる必要がある。これらを今後の課題としたい。
注

1. L. ロビンズ『経済学の本質と意義』(辻六兵衛訳) 東洋経済新報社 1957.
4. Ibid., p. 182.
5. L. ロビンズ『経済学の本質と意義』(辻六兵衛訳) 東洋経済新報社 1957, p.25.
6. L. ロビンズ『経済学の本質と意義』(辻六兵衛訳) 東洋経済新報社 1957.
9. L. ロビンズ 『本質と意義』 p. x x iii.
10. Ibid., p. x x iii.
12. Ibid., p. 70.
13. Ibid., pp. 70-71.
15. Ibid., p. 163.
21. Ibid., p. 2.
23. Ibid., p. 51.
25. Ibid., p. 69.
28. Ibid., p. 10.
29. 高橋正立「「経済とは何か」——マシャル対ロビンズ——手段・目的内容からの規定と行為様式からの規定」『経済論叢』234・235, 1985.11, p. 3.
30. 原信芳「ロビンズ経済学の断章」 p. 272.
31. 辻六兵衛『経済科学の方法的基礎・ロビンズ『Nature』に関する一つのコメント』 pp. 98.
33. Ibid., p. 106, pp. 136-139.
34. フェリス・ディーン『経済思想の発展』 (奥野正寛訳) 1982, pp. 298-299.
35. Ibid., p. 115.
36. Ibid., p. 141.
37. Ibid., p. 141.

20
38 Ibid., p. 140.
39 Ibid., p. 142.
40 Ibid., pp. 146-148.
41 J. N. ケインズ『経済学の領域と方法』（上宮正一郎訳）2000, p. 142.
42 L. Robbins, 『経済学の本質と意義』 p. 186.
43 ここで言う合理的とはロビンズ独自の意味ではなく、矛盾がない等と言った一般的意味での合理性を指す。
44 L. ロビンズ『本質と意義』 p. 230.
46 Ibid., p. 237.
49 Ibid., p. 37.
50 Ibid., p. 33.
51 Ibid., pp. 55-56.
52 Ibid., pp. 64-65.
53 Ibid., p. 67.
56 Ibid., p. 5.
57 Ibid., p. 148.
58 Ibid., p. 147.
59 Ibid., p. 149.
60 Ibid., p. 159.
61 Ibid., p. 164.
62 L. ロビンズ『古典経済学の経済政策理論』 p. 11.
63 Ibid., pp. 11-12.
64 この認識自体は木村雄一「ライオネル・ロビンズと効用の個人間比較」による。
References

＜一次文献＞

＜海外のロビンズ研究＞

＜国内のロビンズ研究＞
根井雅弘「破れた夢——ライオネル・ロビンズの生涯(新・評伝シリーズ〔4〕)」『経済評論』37(8), 1988.8, pp.70-102.
根井雅弘『新版現代イギリス経済学の群像』岩波書店 1995。
早坂忠「近代経済学とライオネル・ロビンズ」『経済セミナー』192, 1971.9, pp. 46-52。
原信芳「ロビンズ経済学の断章」『国際経済論集』第 5 巻 第 2 号(通巻第 10 号) 1998.12, pp.271-282。

＜参考文献＞
松嶋敦茂『現代経済学史 1870~1970－競合的パラダイムの展開』名古屋大学出版 1996．